

図7 桜島 活動経過図（2019年7月～2022年11月15日）

<2022年6月～11月15日の状況>

- ・南岳山頂火口における噴火活動は、2021年7月中旬以降活発となっている。
- ・南岳山頂火口における火映は、高感度の監視カメラにより観測されている。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は7月以降概ね多い状態で推移している。
- ・火山灰の月別噴出量は、噴火活動が低下した2021年5月以降は1万トン前後と少ない状態であったが、噴火活動が活発化した7月以降、4万～8万トンとやや増加した。
- ・火山性地震は、A型地震、B型地震とも、少ない状態で経過している。
- ・火山性微動は主に噴火に伴うものが時々観測された。

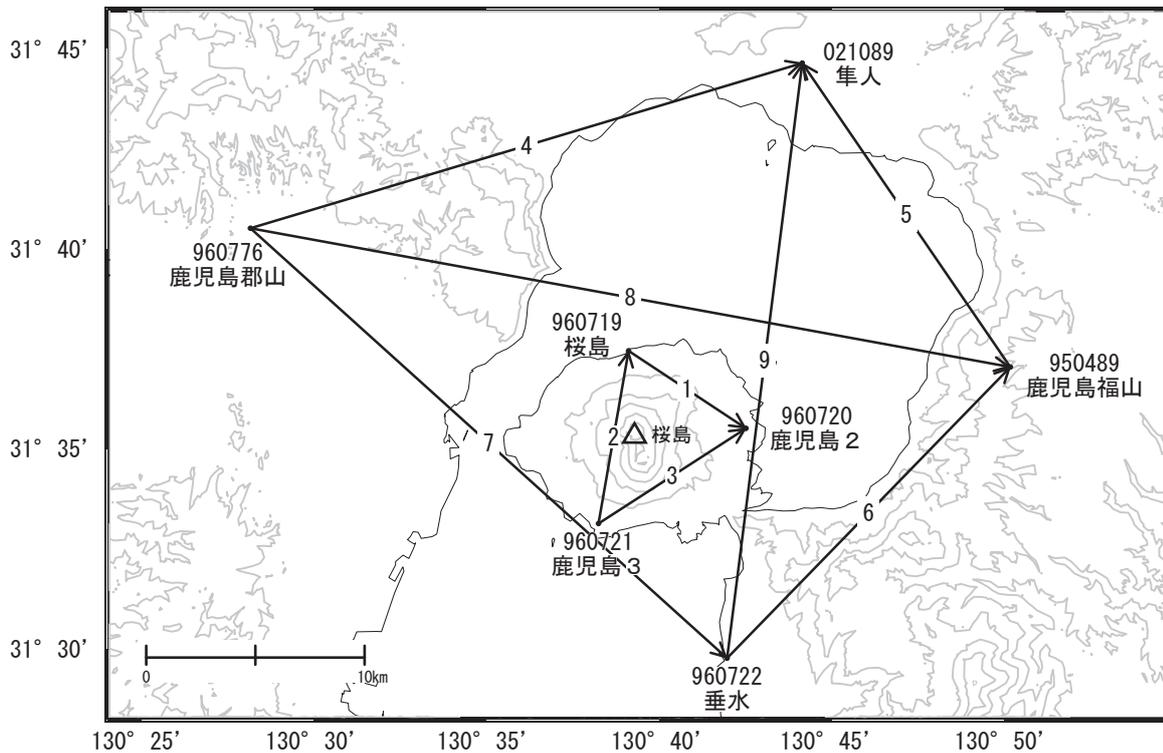
*1 「あみだ川及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動2.5 μ m/s 横山：水平動1.0 μ m/s）している。

*2 図7⑤の火山灰の噴出量の算出は、中村（2002）による。鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成。降灰の観測データには、桜島で噴火がない場合でも風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性がある。

桜島

鹿児島（錦江）湾を挟む「鹿児島郡山」-「鹿児島福山」等の基線で2021年11月頃から見られていたわずかな伸びは、2022年2月頃から停滞しています。また、桜島島内の「桜島」-「鹿児島2」等の基線で2021年11月頃から見られていたわずかな伸びは、2022年2月頃から停滞しています。

桜島周辺GEONET（電子基準点等）による連続観測基線図(1)



桜島周辺の各観測局情報

点番号	点名	日付	保守内容
960719	桜島	20210112	アンテナ交換・レドーム交換
960776	鹿児島郡山	20201214	伐採
		20210419	アンテナ交換
021089	隼人	20190930	受信機交換
950489	鹿児島福山	20211209	受信機交換
960722	垂水	20211209	受信機交換

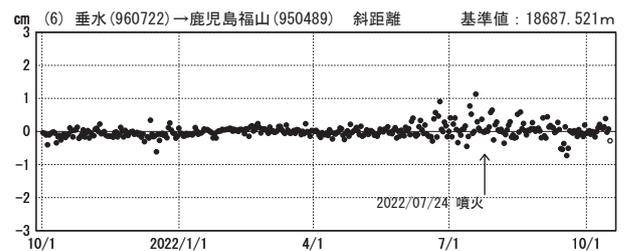
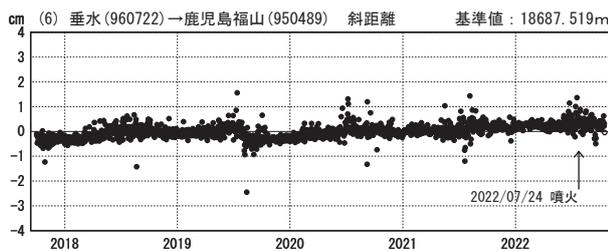
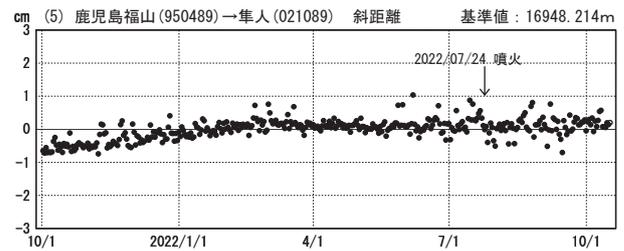
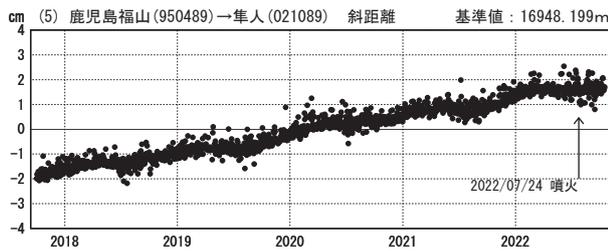
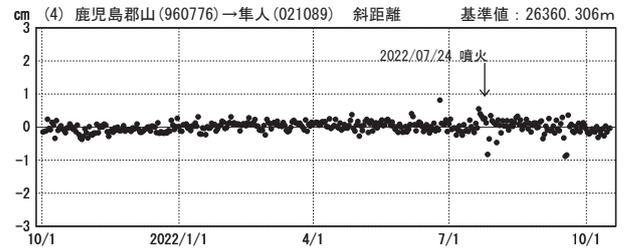
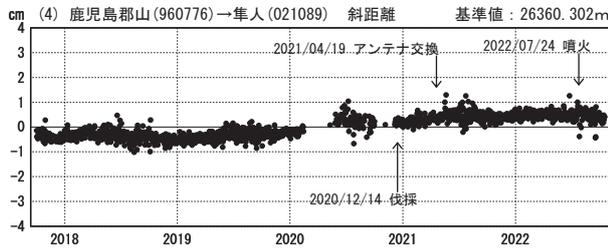
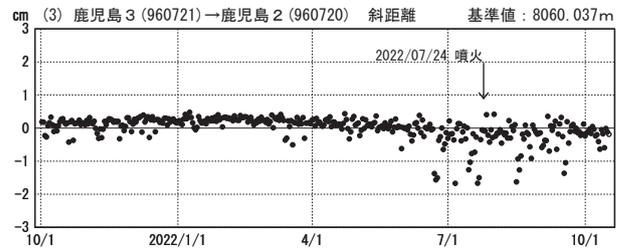
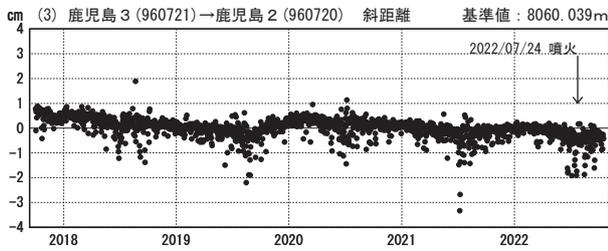
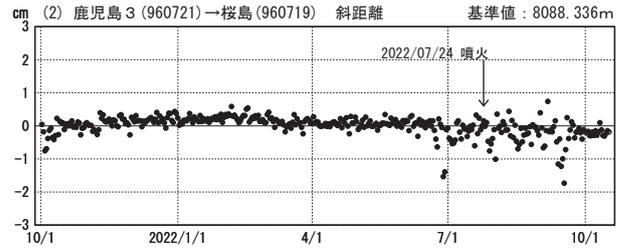
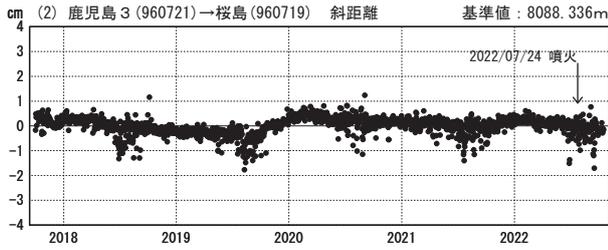
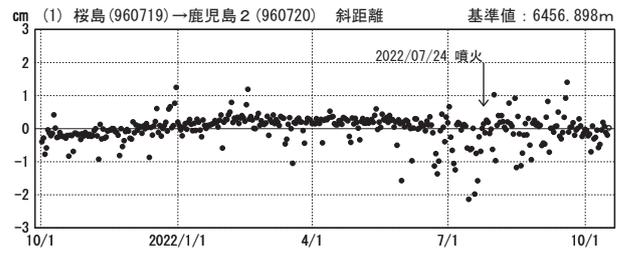
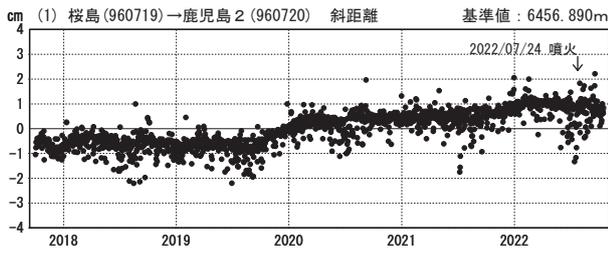
第1図 桜島のGNSS連続解析基線図（上段）、観測局の保守履歴（下段）

基線変化グラフ（長期）

期間：2017/10/01～2022/10/16 JST

基線変化グラフ（短期）

期間：2021/10/01～2022/10/16 JST



●—[F5:最終解] ○—[R5:速報解]

国土地理院

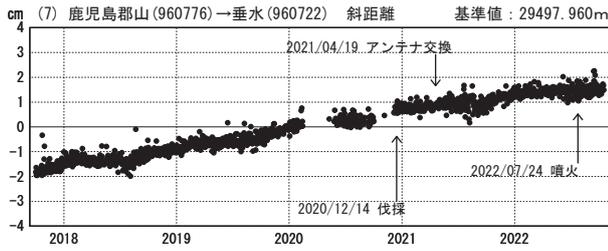
※[R5:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

第2-1図 桜島周辺のGNSS連続解析基線図による基線変化グラフ

(左列：2017年10月～2022年10月16日、右列：2021年10月～2022年10月16日)

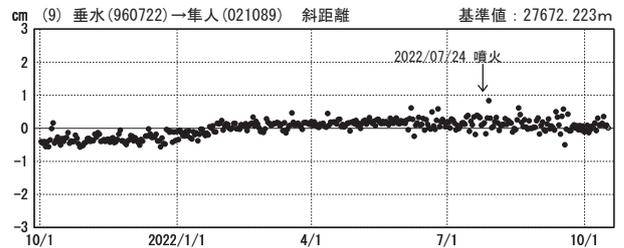
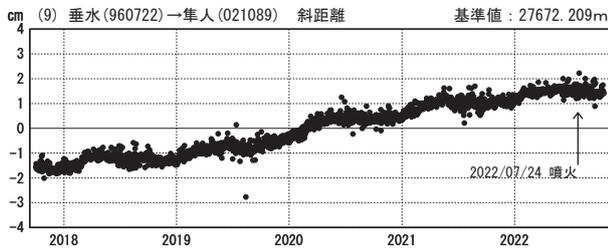
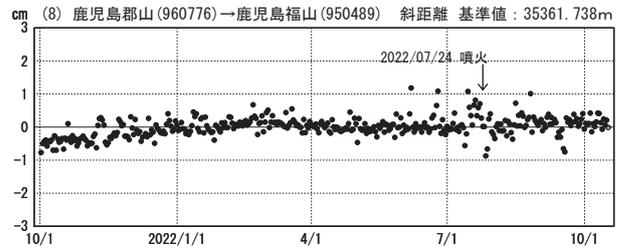
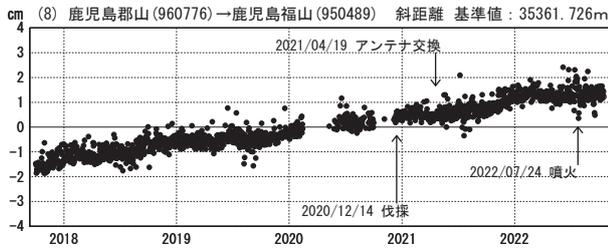
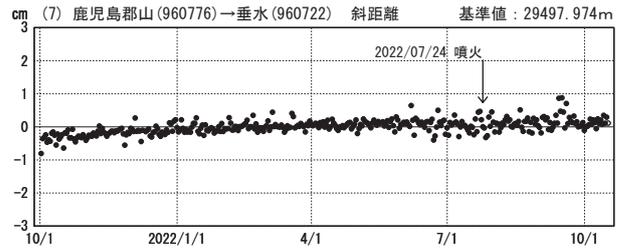
基線変化グラフ (長期)

期間: 2017/10/01~2022/10/16 JST



基線変化グラフ (短期)

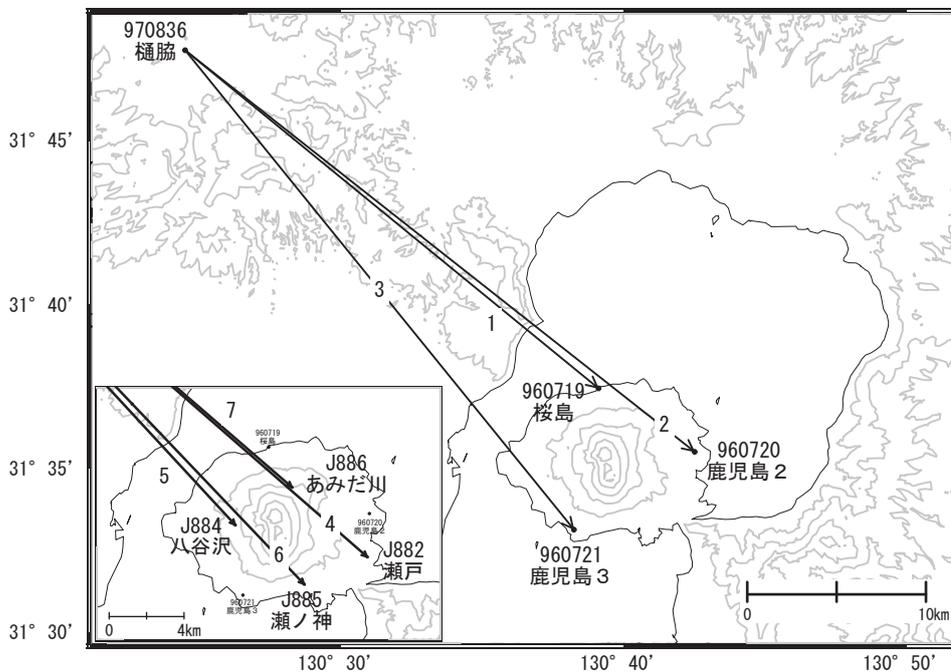
期間: 2021/10/01~2022/10/16 JST



●—[F5:最終解] ○—[R5:速報解]

国土地理院

桜島周辺GEONET (電子基準点等) による連続観測基線図 (2)



桜島周辺の各観測局情報

点番号	点名	日付	保守内容
970836	樋脇	20180123	受信機交換

※[R5:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

第2-2図 (上段) 桜島のGNSS連続観測による基線変化グラフ
 (上左列: 2017年10月~2022年10月16日、上右列: 2021年10月~2022年10月16日)
 (中段、下段) 桜島周辺のGNSS連続観測結果と観測局の保守履歴

桜島

諏訪之瀬島

(2022 年 6 月～2022 年 11 月 11 日)

御岳火口の噴火活動は、9 月下旬から 10 月中旬にかけて一時的に活発化したものの、2022 年 4 月中旬以降、低下している。

地震活動と地殻変動は、2022 年 6 月以降、やや深部のマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する変化である可能性がある。

諏訪之瀬島では、噴火活動が活発となっており、今後も噴火が発生し、火口から概ね 2 km の範囲に大きな噴石が達する可能性がある。

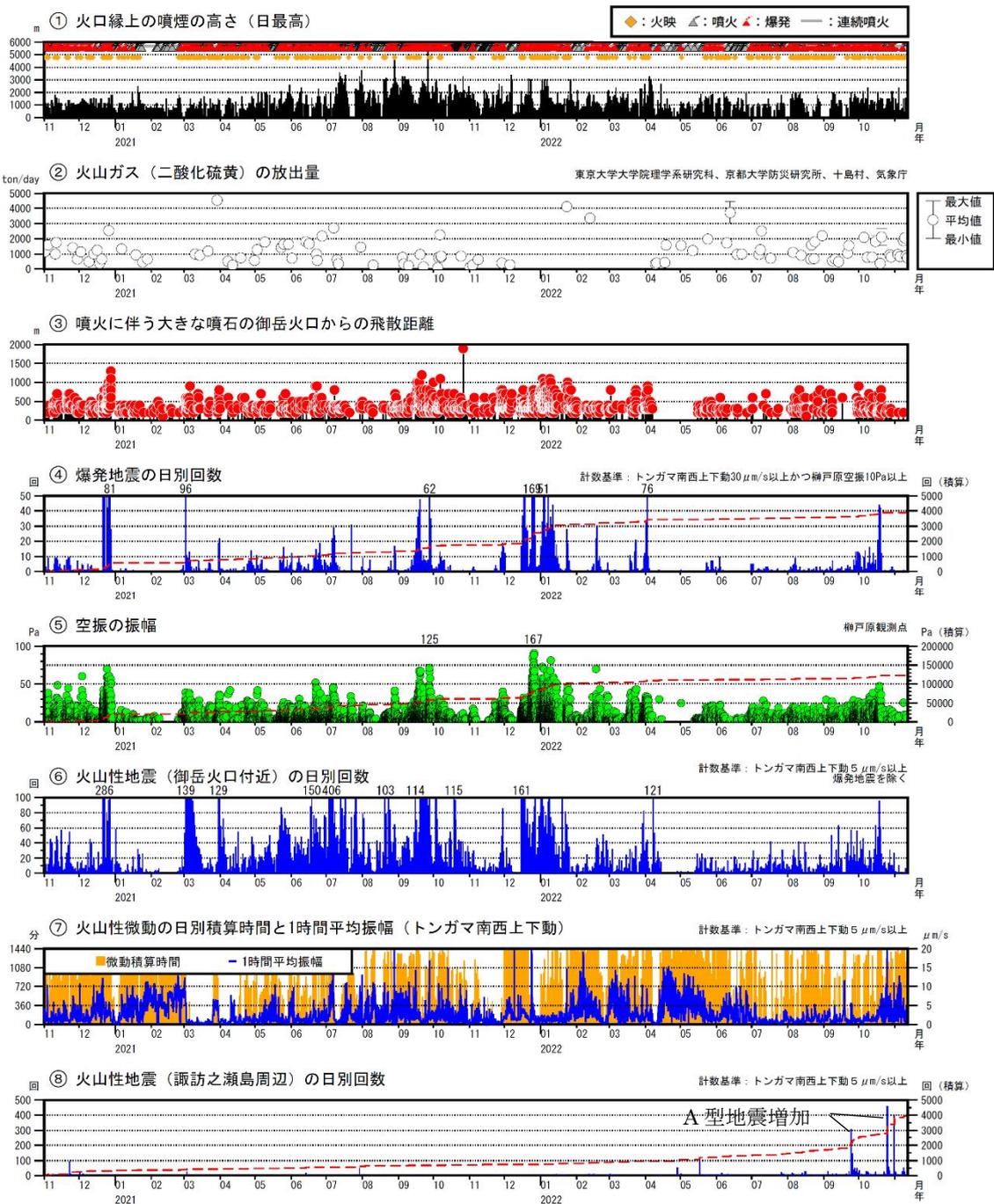


図 1 (前ページ) 諏訪之瀬島 火山活動経過図 (2020 年 11 月~2022 年 11 月 11 日)

<2022 年 6 月~2022 年 11 月 11 日の状況>

- ・御岳火口では、9 月下旬から 10 月中旬にかけて一時的な噴火活動の活発化が認められた。噴火による噴煙の高さの最高は火口縁上 2,400m であった (10 月 8 日、11 月 4 日)。
- ・御岳火口では夜間に高感度の監視カメラで火映を観測した。
- ・9 月 30 日 21 時 41 分の爆発では、火口中心から南方向に約 900m まで大きな噴石が飛散した。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス (二酸化硫黄) の放出量は 1 日あたり 400~3,700 トンで、6 月以降は 2,000 トンを超える日が多くなっている。
- ・御岳火口付近の地震は、ほとんどが B 型地震であり、9 月下旬からの爆発増加に対応して多い状態となっている。
- ・諏訪之瀬島の周辺では主に島の西側を震源とする A 型地震が 5 月中旬頃から増加している。9 月 24 日から 25 日にかけて (454 回、最大 M2.6)、及び 10 月 25 日 (460 回、最大 M3.4) と 31 日 (400 回、最大 M3.4) に一時的に急増した。11 月 8 日にもやや増加した (最大 M3.6)。
- ・十島村役場によると、集落 (御岳火口の南南西約 3.5km) では、時々降灰や鳴動が確認された。

トンガマ南西観測点の地震計が機器障害等により欠測の場合は、ナベタオ観測点 (計数基準: 上下動 $0.5 \mu\text{m/s}$ 、爆発地震計数基準: 上下動 $3 \mu\text{m/s}$) で計数している。

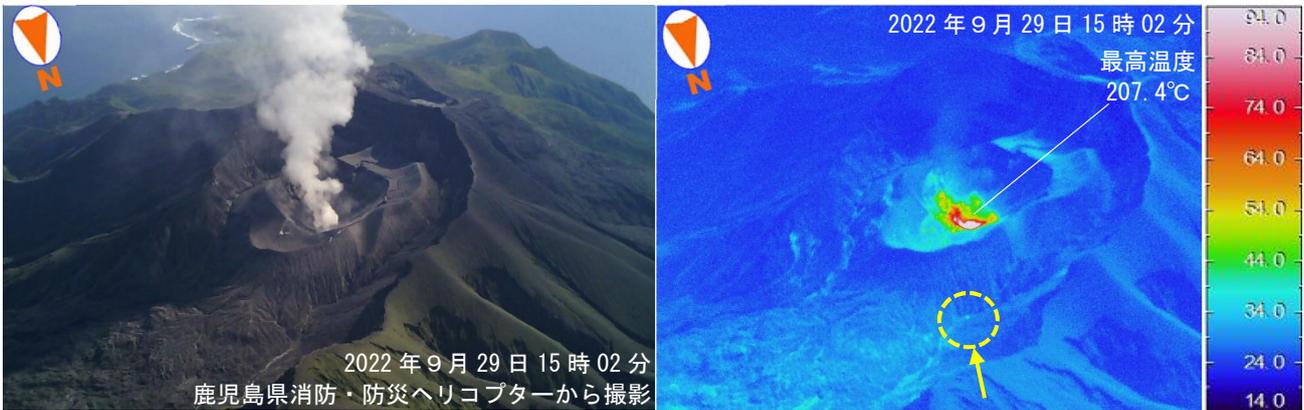


図 2-1 諏訪之瀬島 上空からの観測 (2022 年 9 月 29 日)

- ・9 月 29 日に鹿児島県の協力のもと実施した上空からの観測では御岳火口内に地熱域を確認した。火口周辺では飛散した噴石と考えられる高温部 (黄破線内) が認められた。
- ・これまでの観測と比較して特段の変化は認められなかった。

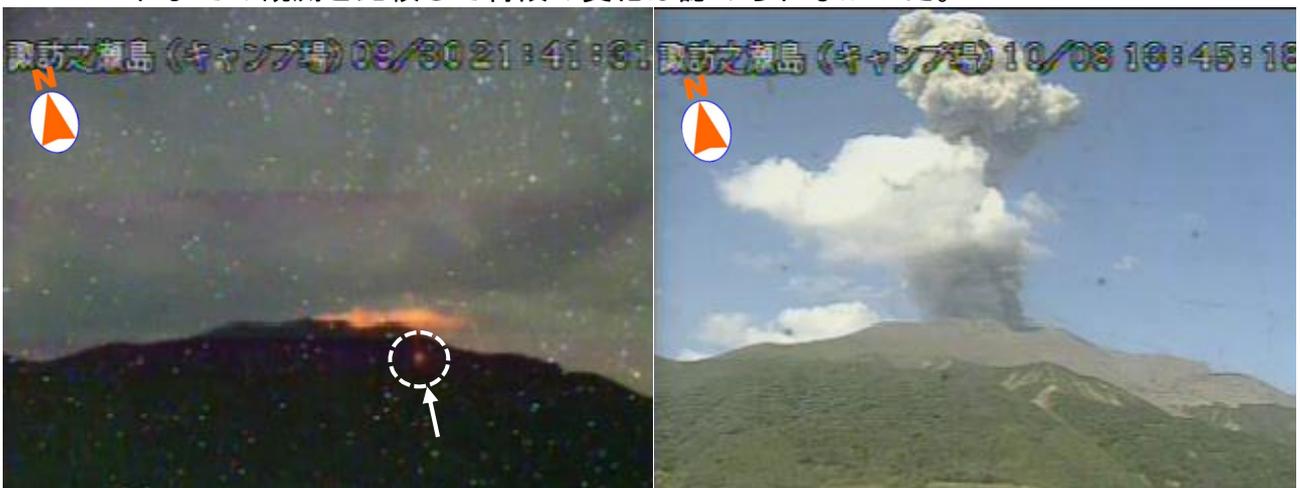


図 2-2 諏訪之瀬島 爆発に伴う噴石の状況 (9 月 30 日) 及び噴火に伴う噴煙の状況 (10 月 8 日、キャンプ場監視カメラ)

- ・9 月 30 日 21 時 41 分の爆発では、火口中心から南方向に約 900m まで大きな噴石が飛散した (左図、白破線内)。
- ・10 月 8 日 13 時 42 分の噴火では噴煙が火口縁上 2,400m まであがった (右図)。

諏訪之瀬島

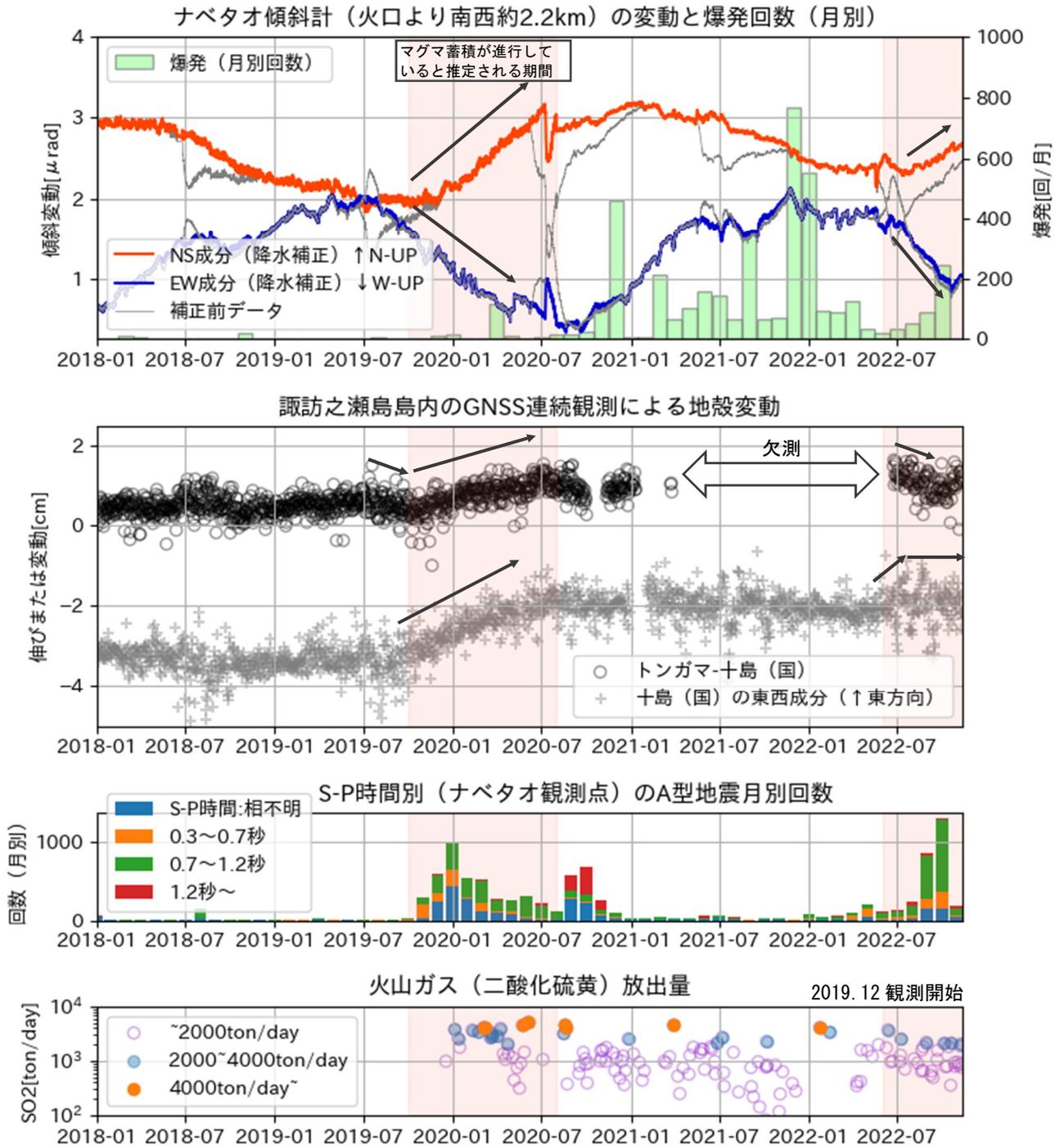


図5 諏訪之瀬島 2019年から2020年と2022年以降の活動比較（2018年～2022年11月11日）
 <2022年6月～2022年11月11日の状況>

- ・傾斜計では、6月頃から北西あがりの長期的な変動が観測されている。
- ・GNSS連続観測では、島内の基線では季節変動を超える変化はみられない。十島村観測点では6月頃から8月頃にかけてわずかに東方向への変動が観測されている。
- ・諏訪之瀬島の周辺では主に島の西側を震源とするA型地震が5月中旬頃から増加している。
- ・傾斜計では、6月頃から北西方向の長期的な変動が観測されている。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり400～3,700トンで、6月以降は2,000トンを超える日が多くなっている。
- ・2019年から2020年と同様に、2022年6月以降はやや深部のマグマだまりへのマグマの蓄積が進行している可能性がある（図中橙色背景の期間）。

西之島

(2022 年 6 月～2022 年 10 月)

気象衛星ひまわりの観測では、10 月 1 日から 12 日にかけて噴火が確認された。引き続き、西之島付近の地表面温度は周囲と比較して高い傾向が認められ、今後、火山活動のさらなる活発化も否定できない。

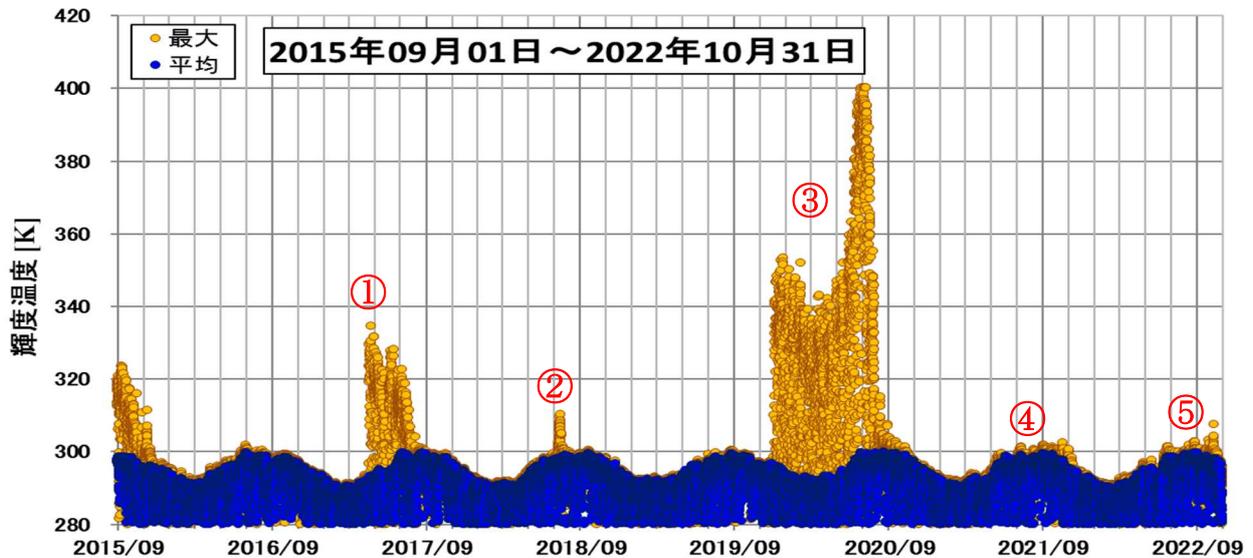


図 1 西之島 気象衛星ひまわり 8 号及び 9 号の観測による西之島付近の輝度温度の変化

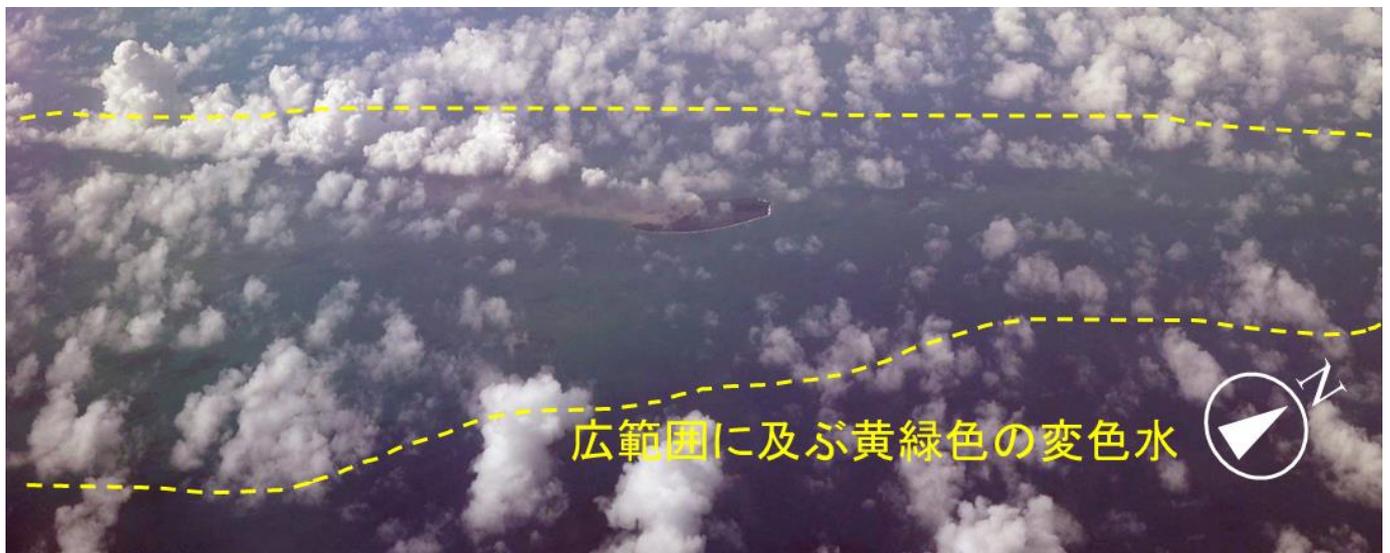
(2015 年 9 月から 2022 年 10 月 31 日まで)

夜間の 1 時間ごとの輝度温度 (中心波長 $3.9\mu\text{m}$ 帯、HIMAWARI-8/AHI) をプロット<アルゴリズム>西之島 (27.247°N , 140.874°E) を中心に $0.28^\circ \times 0.28^\circ$ の範囲 ($15 \times 15 = 225$ 格子点) を抽出。島を含む画素とその周辺 224 格子点の輝度温度について平均値を算出。島の周辺の平均値はバックグラウンドとみなしている。

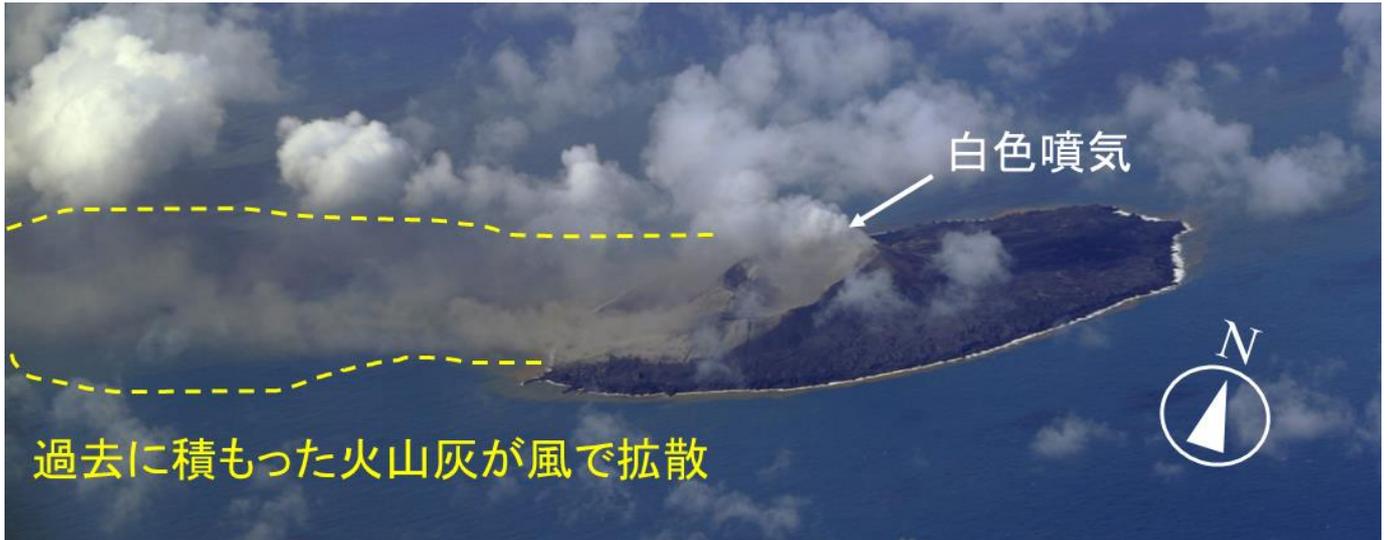
①～⑤は噴火活動期間を示す (表 1 参照)。

- ・ 10 月 1 日から 10 月 12 日にかけて気象衛星ひまわりにより噴火が確認された。
- ・ 2022 年 3 月中旬以降、西之島付近で周辺に比べて輝度温度が高い傾向が認められるものの、2019 年 12 月から 2020 年 8 月の期間に見られたような溶岩流出に伴う輝度温度の上昇と比較すると、その温度は低い。

年月日	活 動 状 況
2022/10/12	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観測中、噴火は認めなかった。 ・ 火砕丘中央火口から白色噴気が高さ約 3,600mまで上がり、西方に流れていた。(第 12～14 図)。 ・ 南東部の火砕丘中腹において白色噴気を認めた (第 14 図)。 ・ 島の西側に降り積もった火山灰が、東風に乗って島の西方に拡散していた (第 13 図)。 ・ 過去の噴煙と見られる、やや灰色がかった雲を島から西方に約 40km の地点まで認めた。 ・ 島のほぼ全周に茶褐色及び黄緑色の変色水の分布を認めた。前回 9/16 観測と比較して、茶褐色の範囲は減少していたが、その外側の黄緑色の範囲は広範囲に広がっていた (第 12～14 図)。 ・ 火砕丘中央火口の湯だまりについて、火口内は噴気で確認できなかった。火口南縁のものは、孔は引き続き認めたが、以前のような顕著な茶褐色の湯だまりは認めなかった (第 14 図)。 ・ 硫黄昇華物は、目視できる範囲では認められなかった (第 14 図)。 ・ 海岸線全周に新規の溶岩流は認められなかった。 ・ 西之島南海丘周辺に、特異事象は認められなかった。



第 12 図 西之島 遠景 (南東方から撮影) 2022 年 10 月 12 日 13:09 撮影



第 13 図 西之島 (南南東方から撮影) 2022 年 10 月 12 日 13:09 撮影



第 14 図 西之島 (東方から撮影) 2022 年 10 月 12 日 12:49 撮影

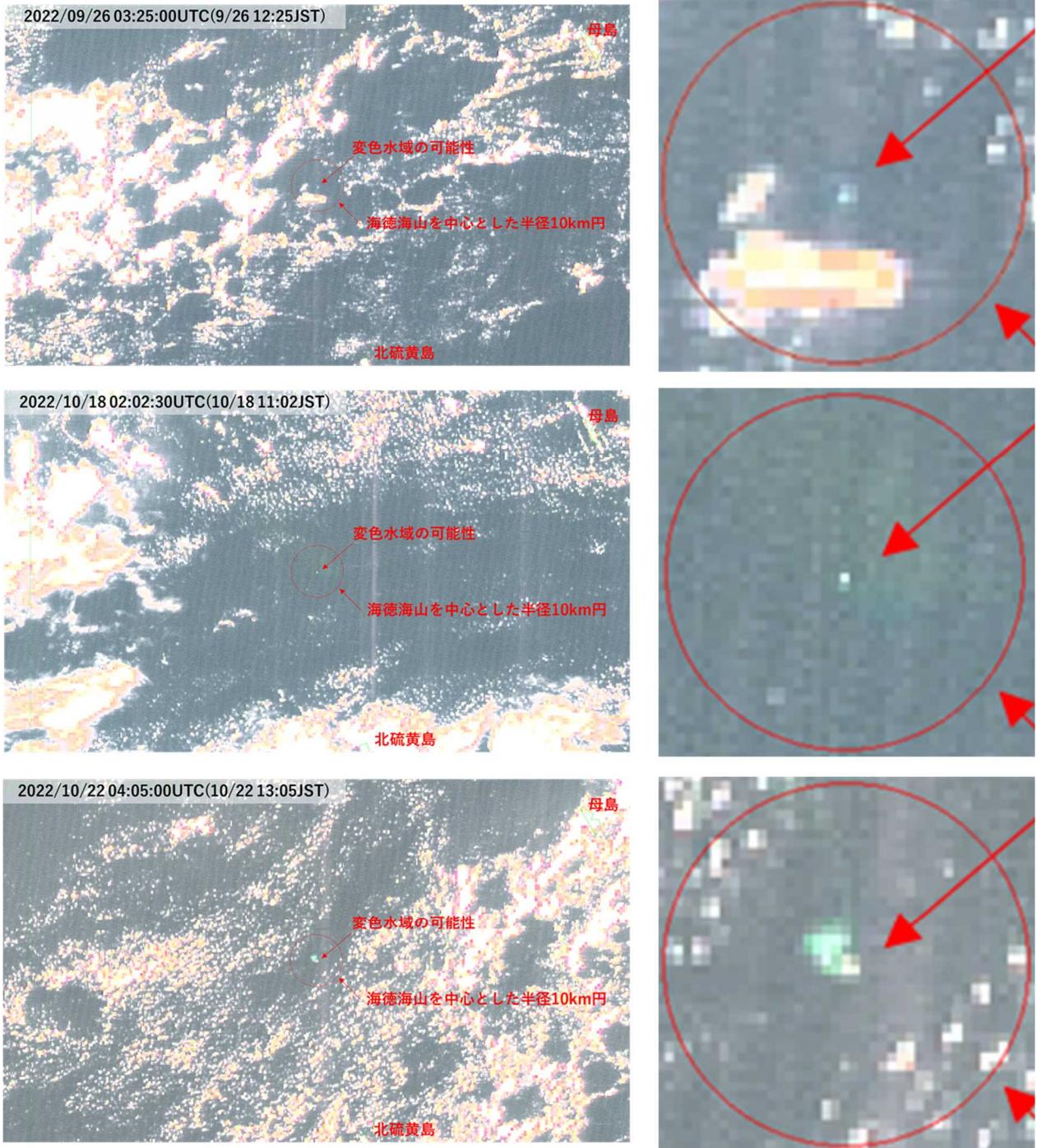


図2 海徳海山 気象衛星ひまわり8号の観測による9月から10月にかけての海徳海山周辺の変色水域の様子

右図は左図の海徳海山を中心とした半径10km円範囲を拡大したもの。

- ・気象衛星ひまわりの観測によって、9月下旬頃から、海徳海山付近で変色水域と考えられる領域が確認された。10月にも変色水域と考えられる領域が確認され、その領域は拡大していた可能性がある。

表 1 海徳海山の 2022 年活動推移

月日	現象	備考
7月11日	変色水域等の特異事象は認められない	海上保安庁の観測結果より
8月18日及び19日	変色水と思われる領域を確認	漁業関係者からの通報
8月23日	円形の黄白色の変色水（直径約100m）を確認	海上保安庁の観測結果より
8月28日	円形の白色の変色水（直径約200m）を複数確認	海上保安庁の観測結果より
9月16日	幅約20m、長さ約30mの青白色の変色水を確認	海上保安庁の観測結果より
9月下旬～	変色水域を確認	気象衛星ひまわりの観測結果より
10月12日	円形の濃厚な黄白色の変色水（直径約200m）を確認	海上保安庁の観測結果より
10月下旬	変色水域拡大の可能性が認められる	気象衛星ひまわりの観測結果より

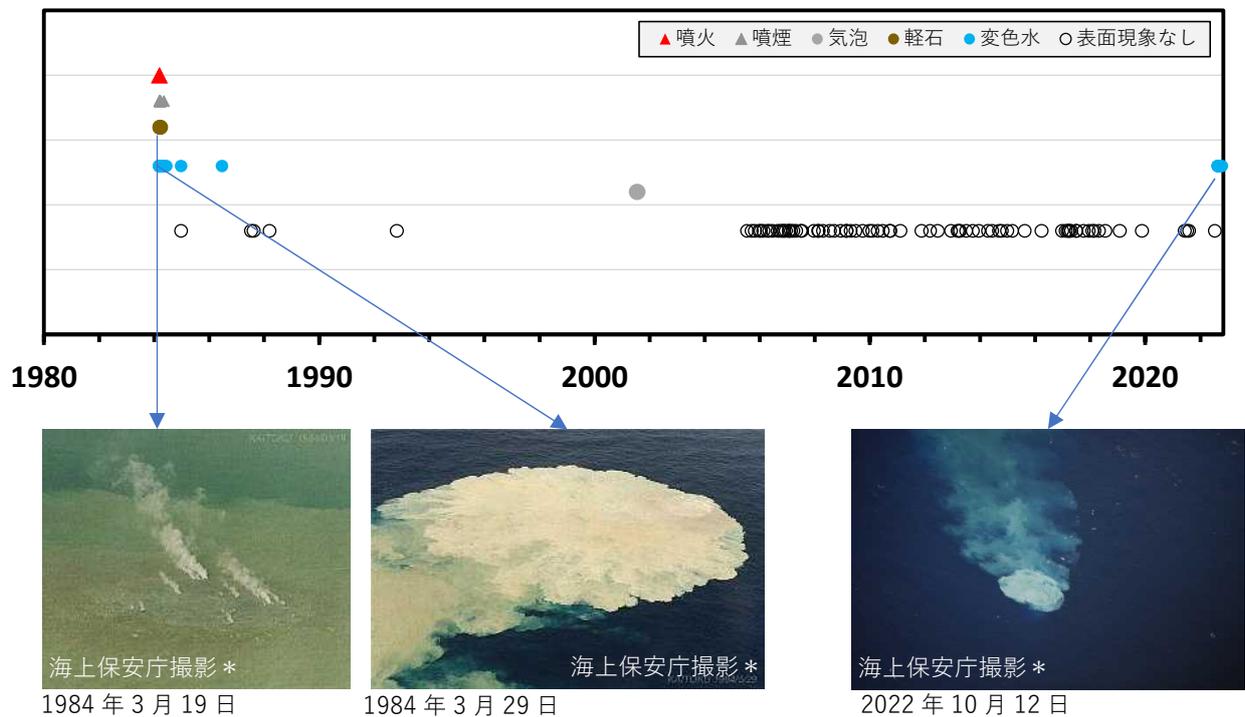


図 3 海徳海山 1980 年以降の活動状況（2022 年 10 月 31 日まで）

シンボルがあるタイミングで観測が行われている。

▲及び▲はそれぞれ噴火及び噴煙（1984 年）を示す。

●、●及び●はそれぞれ変色水、軽石及び気泡が認められた観測、○は変色水等が認められなかった観測を示す。

海上保安庁、第三管区海上保安本部、海上自衛隊、気象庁の観測船、漁船及び報道機関等からの情報による。

- ・ 8 月以降、海徳海山付近で、変色水が確認されている。
- ・ 1984 年 3 月から 6 月にかけて、軽石の浮遊がみられるなどマグマが直接関与した可能性がある噴火が発生した。その後 15 ヶ月程度にわたり変色水が確認された。2001 年 7 月に漁船によって海底からの気泡湧出が確認されて以降、変色水等の表面現象の情報はなかった。

*引用文献：

海上保安庁海洋情報部 海域火山データベース (<https://www1.kaiho.mlit.go.jp/GIJUTSUKOKUSAI/kaiikiDB/kaiyo20-2.htm>)

硫黄島

(2022 年 6 月～2022 年 10 月)

7月上旬から8月上旬にかけてと10月前半に、翁浜沖で、小規模な噴火が確認された。噴出に伴って、新鮮なマグマが噴出したと推定される。GNSS連続観測では、島全体の隆起を示す地殻変動が長期的に継続しており、地震活動や噴気活動も、やや活発な状態が続いている。そのような中で、マグマの噴出が初めて観測されたことから、火山活動が高まる可能性もあり、今後の活動の推移には注意が必要である。

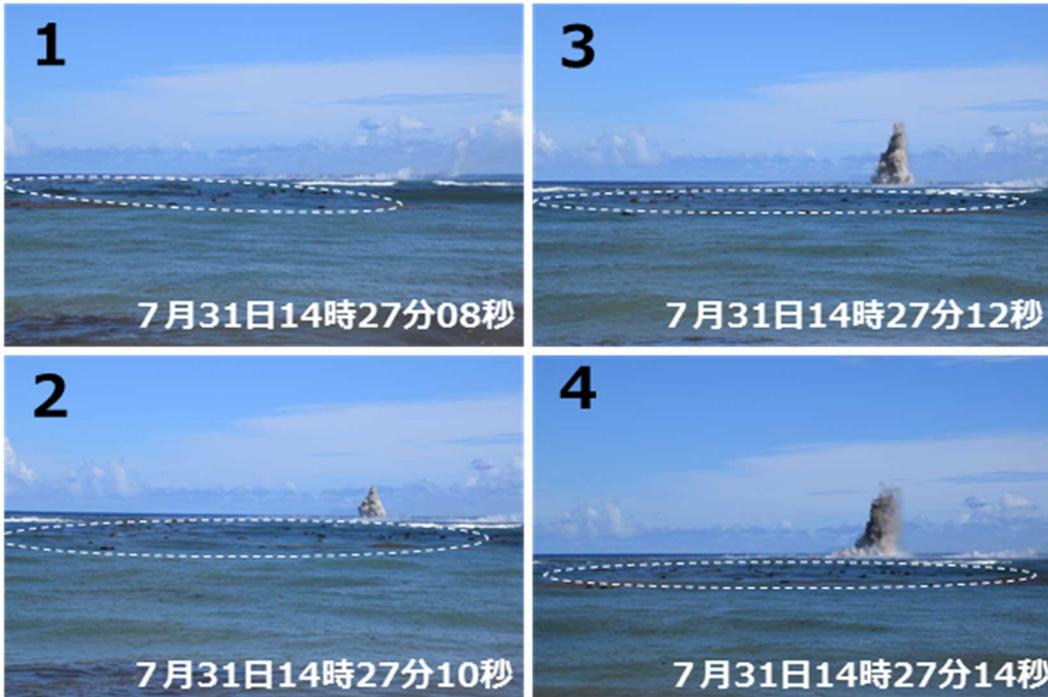


図1 硫黄島 噴火発生時の連続写真 (2022 年 7 月 31 日 14 時 27 分)

- ・ 7月上旬から8月上旬にかけてと10月上旬に、翁浜沖で、断続的に小規模な噴火が確認された。
- ・ 噴火に伴い、最大高さ 30m程度の水柱が噴出していることを確認した。
- ・ 噴出地点周辺には軽石と思われる浮遊物がみられた (白点線内)。

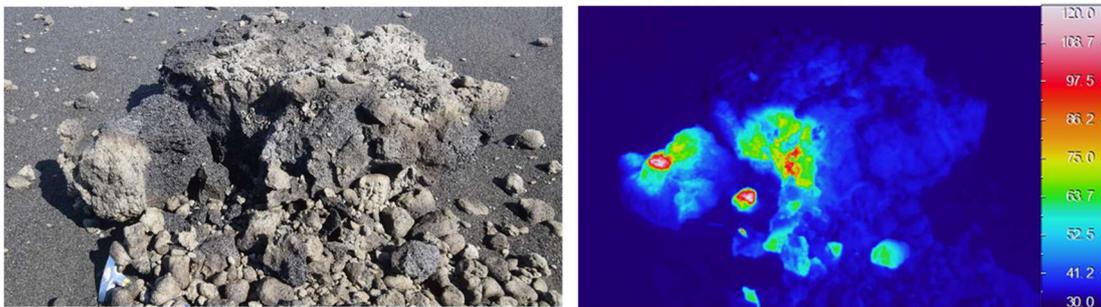


図2 硫黄島 噴出物の状況

- ・ 噴出地点周辺及び翁浜海岸には噴火により放出されたとと思われる軽石が漂着していた。
- ・ 軽石はもろく、割れた内部は 120℃を超えていた。

図 9 硫黄島 過去にみられた地殻変動（前ページ）

- ・ ①2018 年 9 月 8 日からの一時的な火山性地震の増加に伴い、急激な隆起を観測した。また、翁浜沖では海底噴火の発生と推測される海水噴出が認められた。
- ・ ②2019 年 10 月 10 日から 14 日にかけて硫黄島北部が沈降する地殻変動がみられた。火山性地震の一時的な増加はみられたが、顕著な表面現象は確認されていない。
- ・ ③2021 年 11 月 23 日から 25 日頃にかけて島中心部で沈降がみられた。11 月 24 日には島北部の漂流木海岸で噴火が発生した。この噴火に伴い 23 日から 24 日かけて火山性地震の増加がみられた。また、24 日から 26 日頃にかけて連続的な火山性微動が観測された。なお、2021 年 8 月から 9 月にかけて、翁浜沖で海底噴火の噴出と推測される海水噴出とその発生前後で単色型微動の増加が確認された。
- ・ ④2022 年 7 月からの翁浜沖の噴火・海水噴出に伴う明瞭な地殻変動は観測されていない。

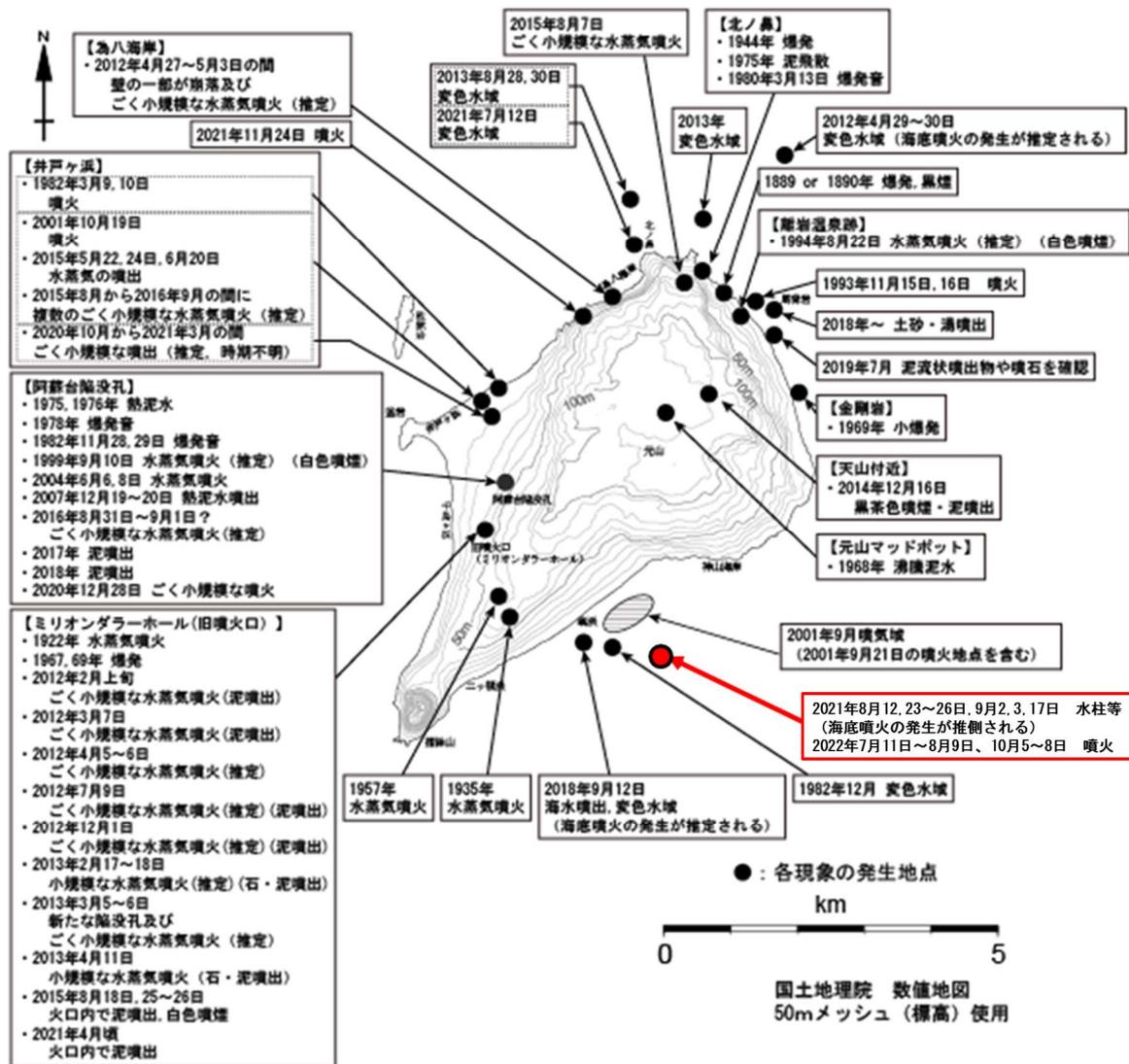


図 10 硫黄島 過去に噴火等が確認された地点及びその後の状況

「鵜川元雄・藤田英輔・小林哲夫，2002，硫黄島の最近の火山活動と 2001 年噴火，月刊地球，号外 39 号，157-164。」を基に、気象庁において一部改変及び 2004 年以降の事象について追記

- ・ 7 月上旬から 8 月上旬にかけて及び 10 月上旬に翁浜沖で噴火が確認された。

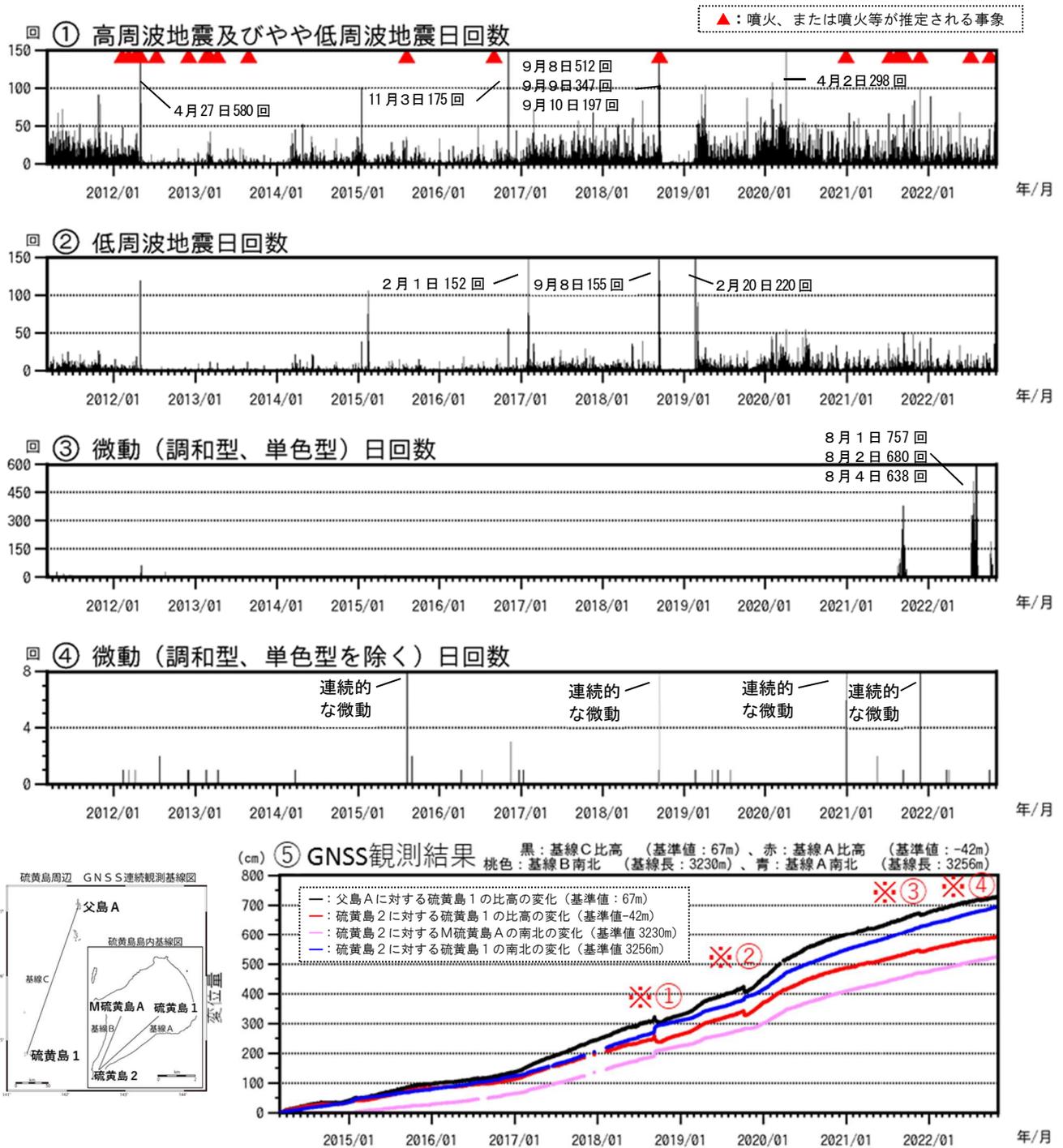


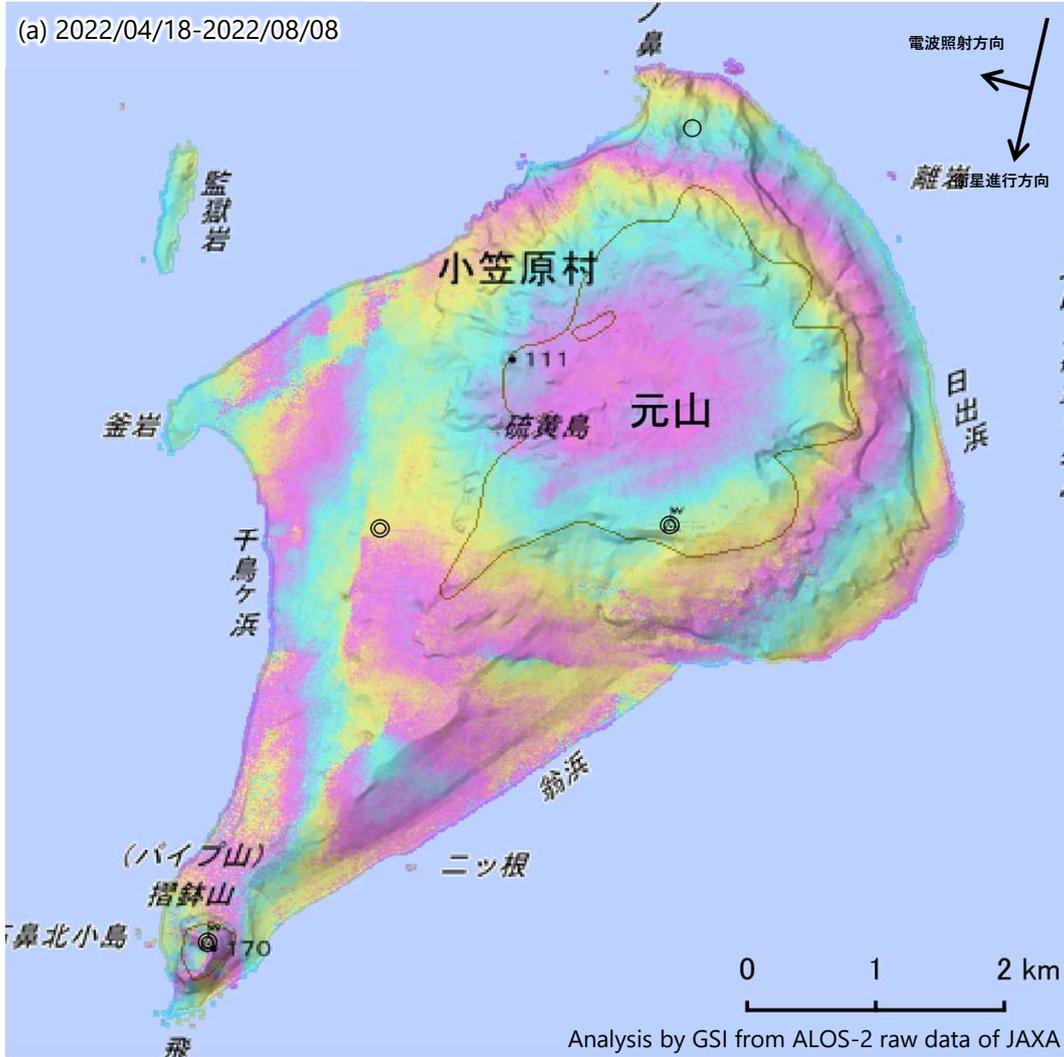
図 8 硫黄島 火山活動経過図 (2011 年 3 月 8 日～2022 年 10 月 31 日)

⑤中の番号は図 9 の各番号に対応

- ・火山性地震は、概ねやや少ない状態で経過した。
- ・7月上旬から8月上旬及び10月上旬に単色型微動が観測された。
- ・単色型微動の増加は2021年8月から9月にもみられた。このときも単色型微動の発生に伴い、空振の発生や翁浜沖での海水噴出が確認されており、噴火が発生していた可能性がある。
- ・GNSS 連続観測では、長期的に島全体の隆起が継続している。

硫黄島のSAR干渉解析結果について

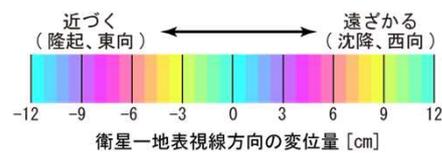
元山付近に収縮とみられる変動が、摺鉢山付近に周囲と比べて衛星から遠ざかる変動が見られます。阿蘇台断層に沿って変動が見られます。



	(a)
衛星名	ALOS-2
観測日時	2022/04/18 2022/08/08 11:32頃 (112日間)
衛星進行方向	南行
電波照射方向	右(西)
観測モード*	U-U
入射角	37.2°
偏波	HH
垂直基線長	-158m

* U：高分解能(3m)モード

- ◎ 国土地理院GNSS観測点
- 国土地理院以外のGNSS観測点



背景：地理院地図 標準地図・陰影起伏図・傾斜量図

第6図 「だいち2号」PALSAR-2による硫黄島の解析結果

硫黄島

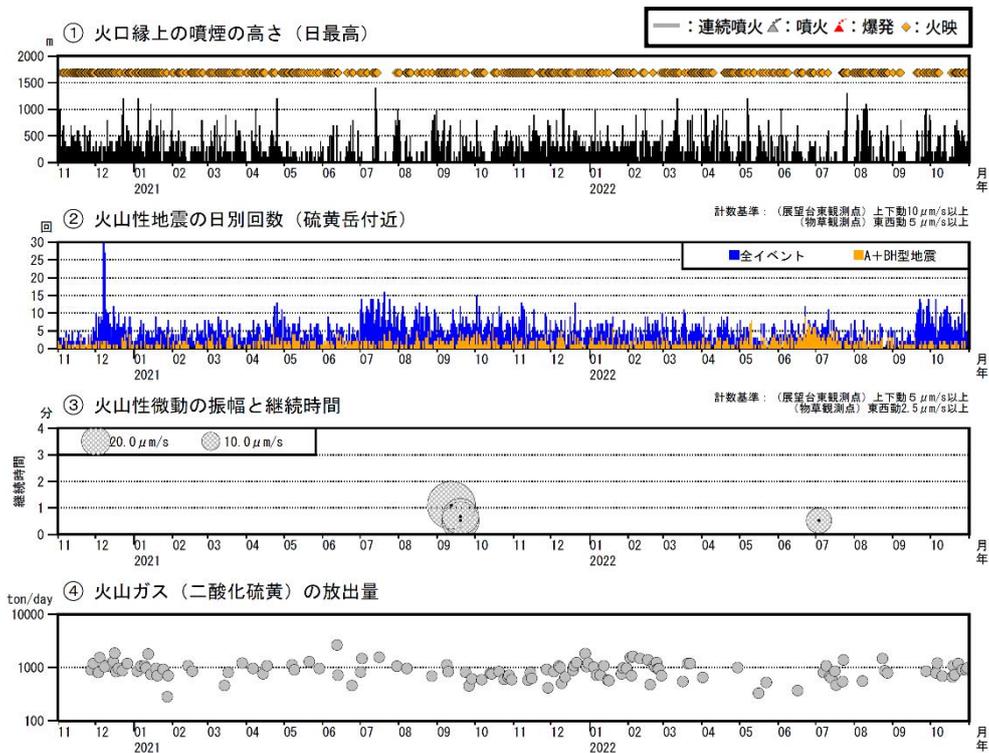
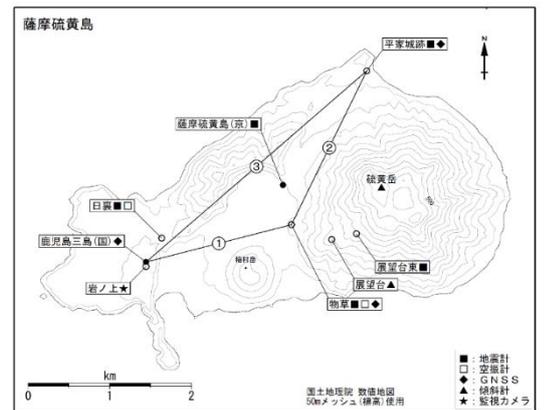
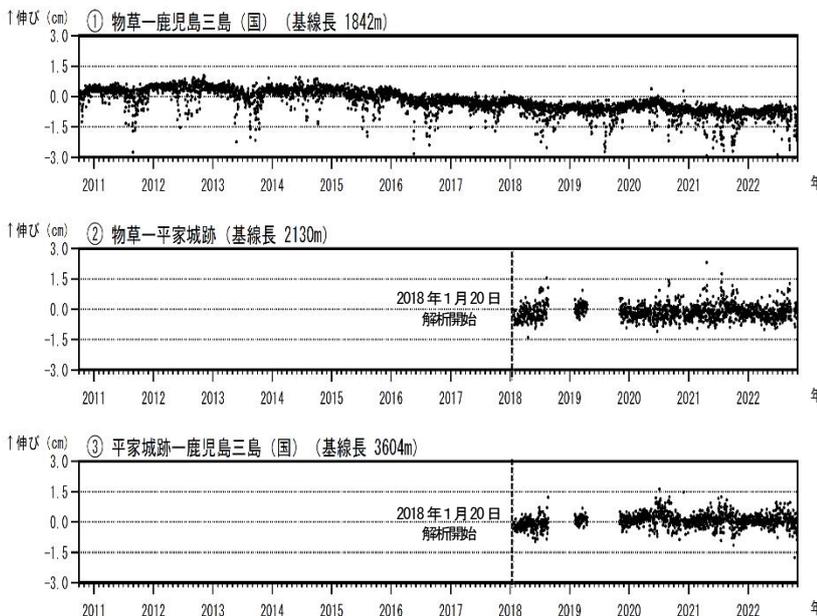


図2 薩摩硫黄島 火山活動経過図 (2020年11月~2022年10月31日)

<2022年6月~2022年10月31日の状況>

- ・硫黄岳火口では、2020年10月6日以降、噴火は発生していない。噴煙は概ね500m以下であったが、時折1,000mを超えて上昇した。高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映を時々観測した。
- ・火山性地震は少ない状態であったが、9月下旬からやや増加している。6月から7月にかけてA型地震がやや増加した。火山性微動は7月に1回観測された。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は1日あたり1,000トン前後(400~1,500トン)が継続している。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示している。
(京)：京都大学、(国)：国土地理院

図3 薩摩硫黄島 GNSS連続観測による基線長変化 (2010年10月~2022年10月31日)

2015年頃から①の基線では長期的な縮みの傾向がみられる。

各基線番号は左図の①~③に対応している。基線の空白部分は欠測を示している。(国)：国土地理院

焼 岳

(2022 年 6 月～2022 年 10 月)

山頂付近の微小な地震活動が継続して発生し、GNSS 連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張の可能性のある変化が継続している。また、焼岳周辺では数年おきに震度 1 以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられることから、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきている可能性がある。

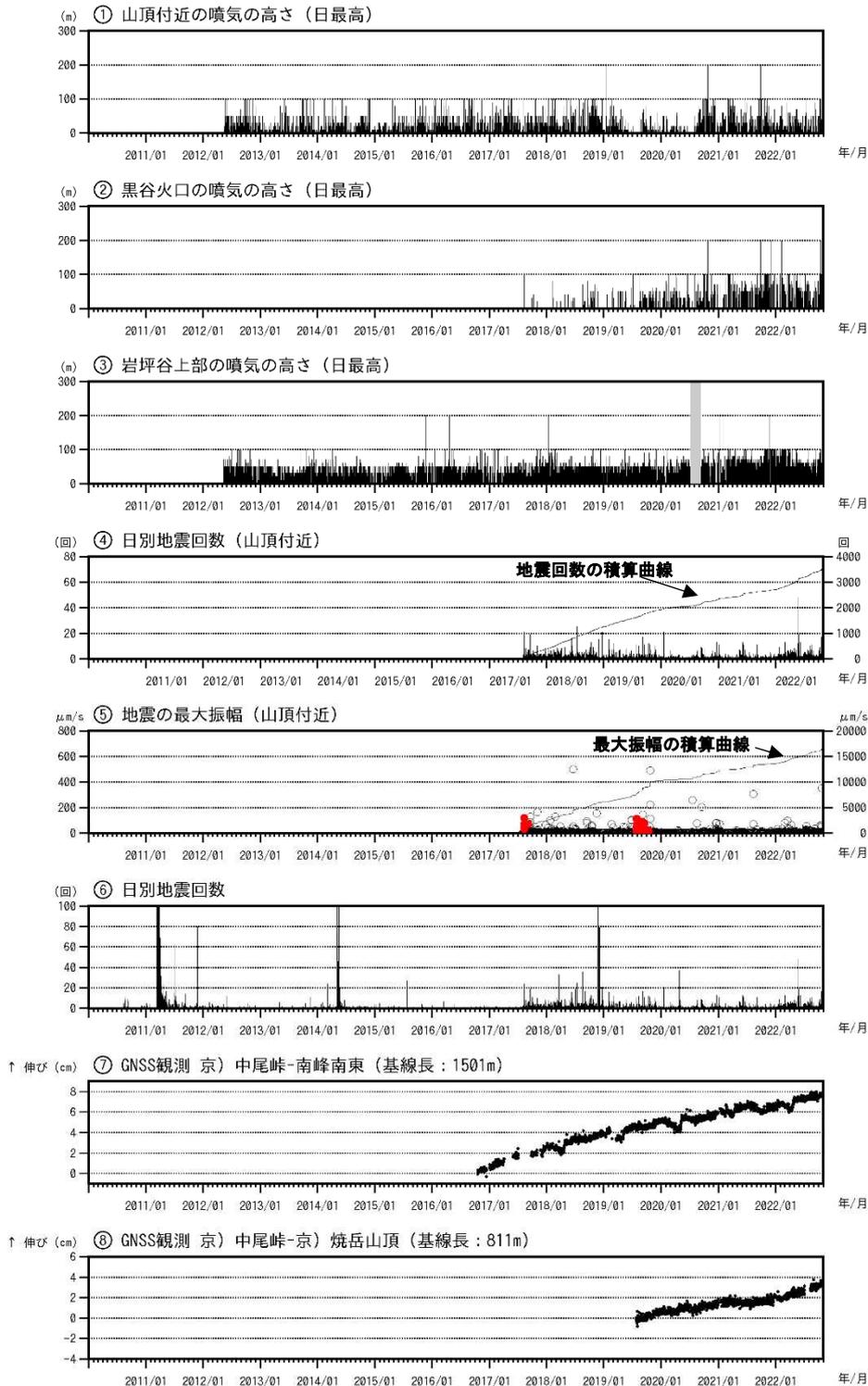


図 1 焼岳 火山活動経過図 (前ページ) (2010 年 10 月 1 日~2022 年 10 月 31 日)

- ④山頂付近の地震とは、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことを示す。
- : 空振を伴う火山性地震
- ⑦⑧の空白部分は欠測を示す。京) : 京都大学。⑦⑧は図 3 の基線番号⑥⑧に対応
- ・黒谷火口の噴気の高さは 2017 年 8 月以降観測される頻度が増えており、2021 年 10 月頃から日最大 100 m を観測する頻度が次第に増加している。
- ・2017 年 8 月に観測を開始して以降、山頂付近を震源とする火山性地震が 1 日あたり数回程度発生している。
- ・2017 年、2019 年には空振を伴う火山性地震が発生した。
- ・焼岳周辺では数年おきにまとまった地震活動がみられるが、2021 年 10 月以降、周辺でのまとまった地震は観測されていない。
- ・GNSS 連続観測において、山頂付近の緩やかな膨張と思われる変動が継続している。

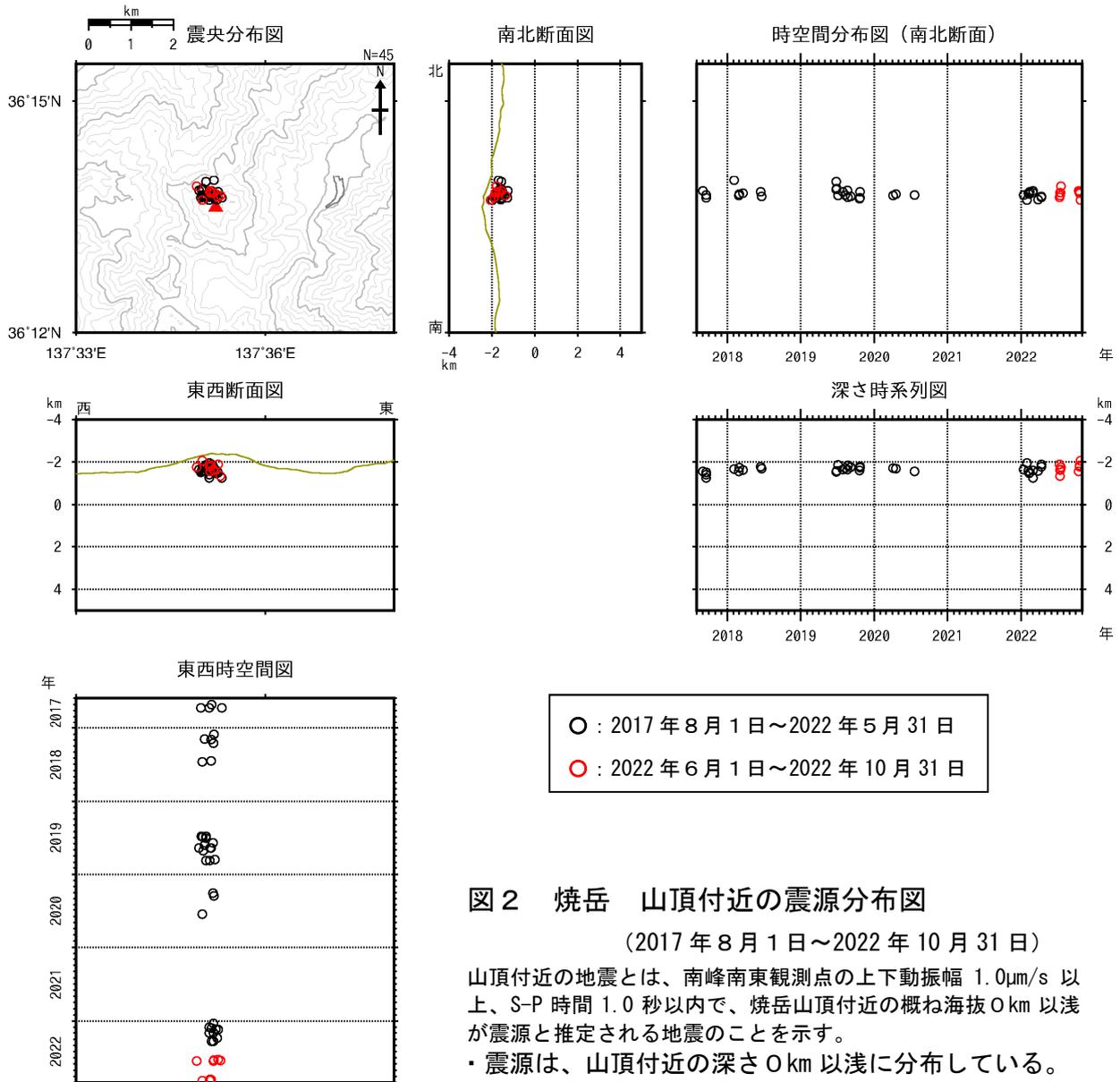


図 2 焼岳 山頂付近の震源分布図

(2017 年 8 月 1 日~2022 年 10 月 31 日)

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 1.0 μ m/s 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことを示す。

- ・震源は、山頂付近の深さ 0 km 以浅に分布している。

鶴見岳・伽藍岳

(2022年6月～2022年10月)

伽藍岳では7月8日に浅い所を震源とするA型地震が一時的に増加した。翌9日以降は少ない状態となっている。

鶴見岳では火山性地震は少ない状態で経過したが、鶴見岳付近が震源と推定されるB型地震が時々発生している。

地殻変動観測では、特段の変化は認められない。

現時点では噴火の兆候は認められないが、火山活動の推移に留意が必要。

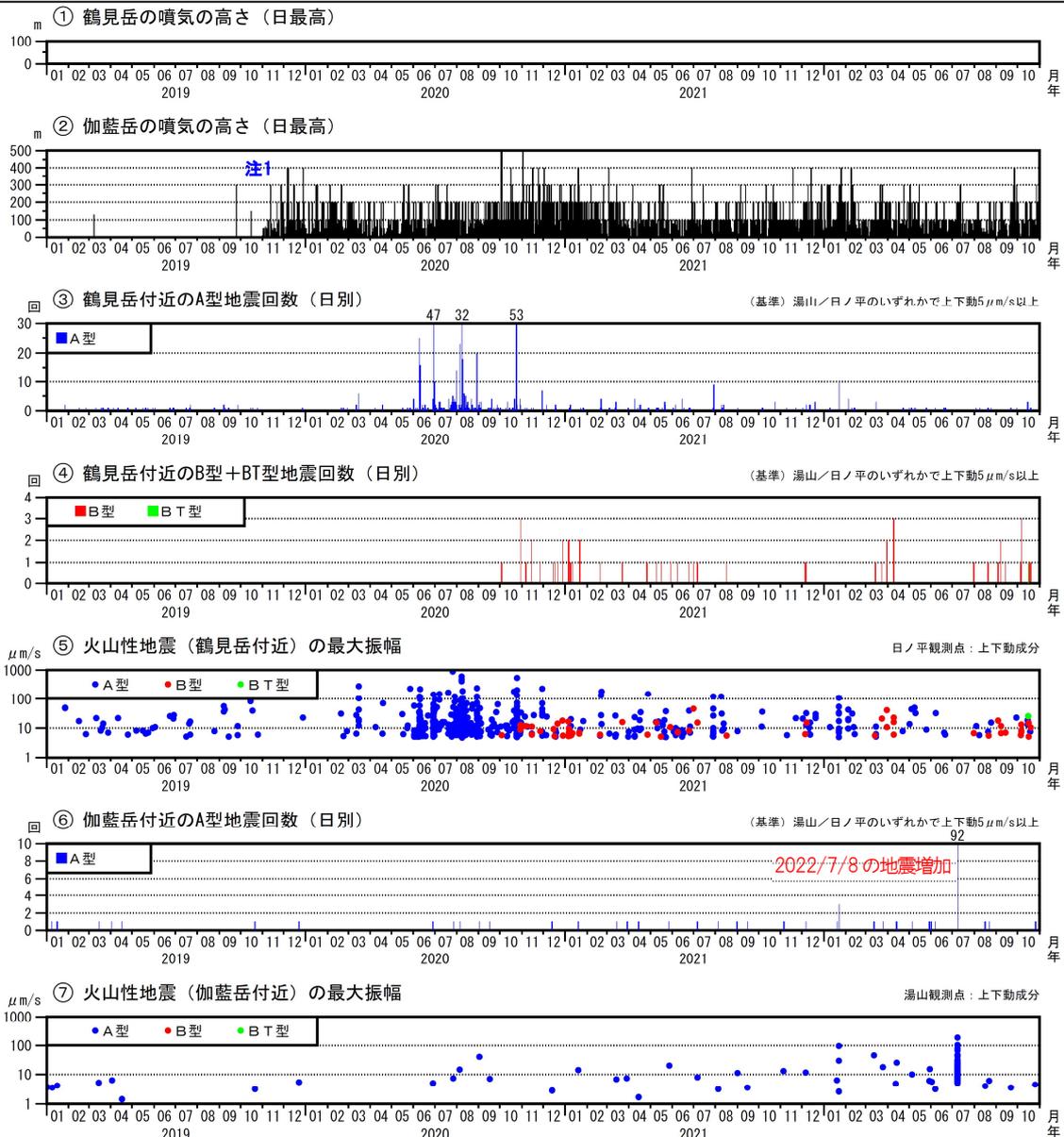


図1 鶴見岳・伽藍岳 火山活動経過図 (2019年1月～2022年10月31日)

<2022年6月～2022年10月31日の状況>

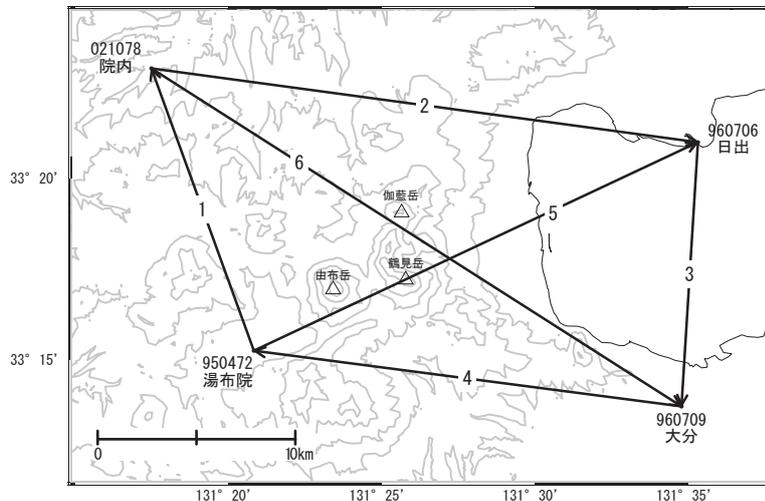
- ・伽藍岳で噴気が噴気地帯上 400mまで上がった。
- ・鶴見岳付近では、A型地震は少ない状態で経過した。B型地震は7月下旬以降、時々発生し、10月16日にBT型地震が1回発生した。
- ・伽藍岳付近では、A型地震が7月8日に一時的に増加した。B型地震は観測されていない。

注1：伽藍岳では、2019年11月から塚原無田監視カメラによる噴気の観測を開始した。

鶴見岳・伽藍岳・由布岳

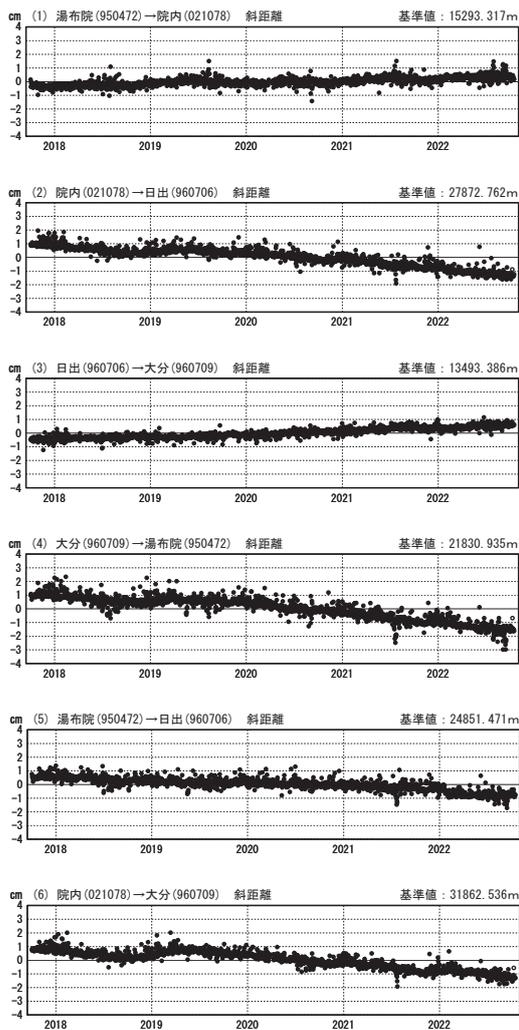
GNSS連続観測結果では、顕著な地殻変動は見られません。

鶴見岳・伽藍岳・由布岳周辺GEONET(電子基準点等)による連続観測基線図



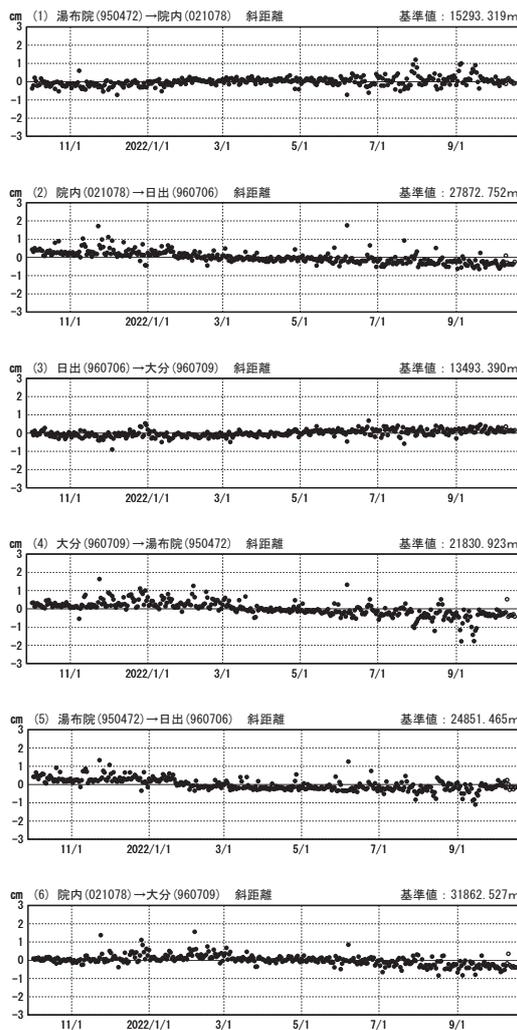
基線変化グラフ (長期)

期間: 2017/10/01~2022/10/16 JST



基線変化グラフ (短期)

期間: 2021/10/01~2022/10/16 JST



●---[F5:最終解] ○---[R5:速報解]

国土地理院

※[R5:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

第1図 鶴見岳・伽藍岳・由布岳周辺のGNSS連続解析基線図(上段)、

基線変化グラフ(下段 左列:2017年10月~2022年10月16日、右列:2021年10月~2022年10月16日)

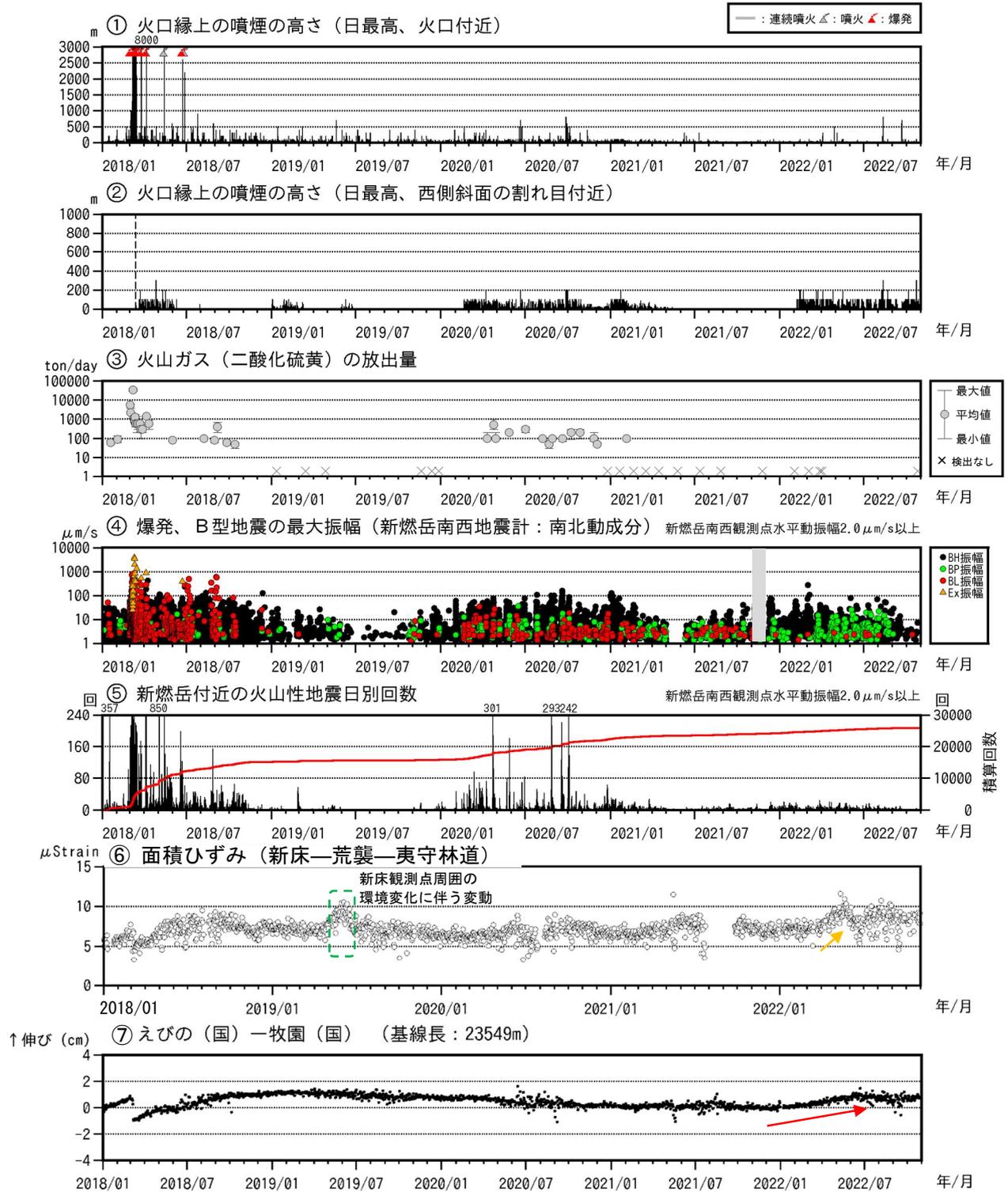


図 3 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2018年1月～2022年10月）

<2022年6月～10月の状況>

- ・新燃岳火口では、白色の噴煙の高さは概ね火口縁上100m以下で、西側斜面の割れ目では、噴気の高さは概ね100m以下で経過し、特段の変化は認められない。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2021年2月下旬以降は検出限界未満で経過している。
- ・新燃岳の火口直下を震源とする火山性地震は、2022年3月27日に多い状態となったが、その後は増減を繰り返しながら次第に減少し、7月下旬以降は少ない状態で経過した。
- ・GNSS連続観測では、2021年12月頃から、霧島山を挟む基線において、霧島山の深い場所でのマグマの蓄積を示すと考えられる伸びが認められていた（赤矢印）が、7月頃から停滞している。また、新燃岳付近の膨張を示すと考えられる基線のわずかな伸び（橙矢印）は、6月以降停滞している。

④の灰色の枠内は、新燃岳南西観測点の障害のためデータが抜けている期間を示す。

⑤の赤線は、地震の回数の積算を示す。

口永良部島

(2022 年 6 月～2022 年 10 月)

新岳火口では、2020 年 8 月 30 日以降、噴火は観測されていない。
 火山性地震は 4 月以降概ね少ない状態で経過していたが、7 月 30 日から 31 日にかけて古岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が一時的に増加した。8 月 1 日以降は概ね少ない状態となっている。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は概ね 50 トン以下と少ない状態で、検出限界を下回ることもあった。GNSS 連続観測では、2021 年 5 月以降、特段の変化は認められない。
 口永良部島では、火山活動は低下しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低いと考えられる。

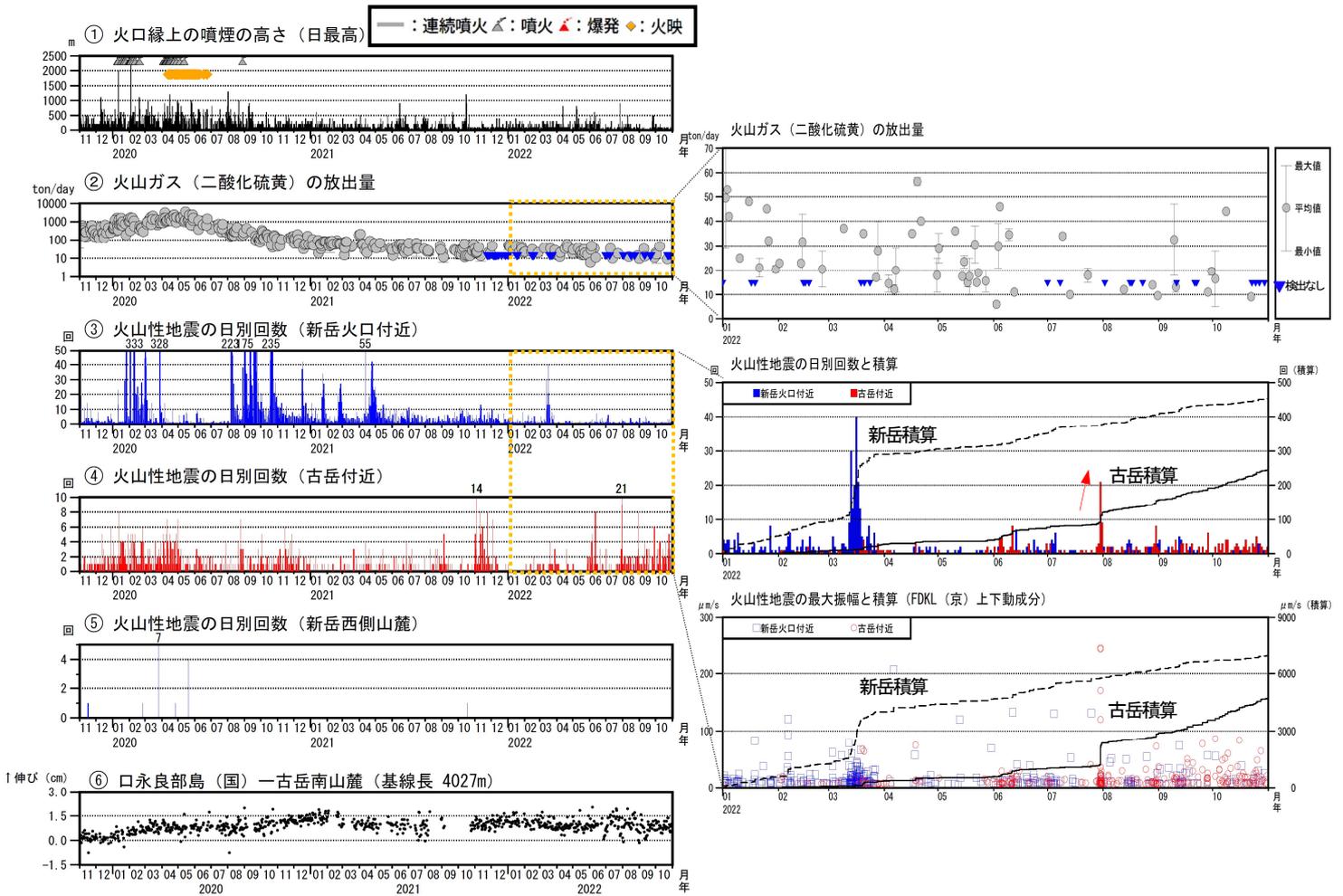


図1 口永良部島 火山活動経過図 (左：2019 年 11 月～2022 年 10 月、右：2022 年 1 月～2022 年 10 月)

<2022 年 6 月～2022 年 10 月の状況>

- ・噴火は発生していない。火映は観測されず、噴煙の高さは火口縁上概ね 500m以下で経過した。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、概ね 50 トン/日以下と少ない状態となっており、検出限界を下回る日も時々みられた。
- ・新岳火口付近を震源とする火山性地震は概ね少ない状態で経過した。
- ・7 月 30 日から 31 日にかけて古岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加した。その後減少したが、古岳付近の地震は7 月 30 日以前と比べて多い状態で経過している。
- ・新岳西側山麓の火山性地震及び火山性微動は観測されなかった。
- ・GNSS 連続観測では特段の変化は認められていない。